別記様式第４号（その２）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年5月1日

氏名　黒田暢子　印

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	看護教育学　シミュレーション看護教育

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1）臨地実習指導 ①基礎看護実習 ②急性期　「急性期看護実習」 「成人看護学実習Ⅱ」 ③慢性期・終末期「慢性・終末期看護実習」 「成人看護学実習Ⅰ」 ④回復期　「リハビリテーション看護実習」	平成24年度 平成21年度 ～平成26年度 平成27年度～ 平成29年11月末 平成20年度 平成27年度～ 平成29年11月末 平成20年度 ～平成27年度	成人期にあるすべての健康レベルを対象とした看護に関する臨地指導を行っている。学生に対する教育を行う際、より拡い視野で、かつ臨床的思考につながるアドバイスを心掛けていた。
2)学内のシミュレーション教育の発展に向けた活動 ①シミュレーション教育に関する海外研修参加と教育方法改善	平成22年8月23日 ～8月30日	海外派遣研修として、ハワ大学医学部SimTikiシミュレーションセンター「シミュレーション教育ワークショップ」に参加し、効果的な教育方法について示唆を得た。
②シミュレーション教育企画運営部会活動	平成24年7月9日 ～平成28年度	シミュレーション教育企画運営部会員として（平成24年度は名称：スキルラボ企画運営部会）、学内のシミュレーション教育発展に向けた活動を行っていた。
・ＦＤ講師	平成27年3月3日	第17回IPUmeeting(学内FD)を企画し、「本学におけるシミュレーション教育の在り方とIPUあいらぼの活用方法についての展望」について講師として講義を行った。
・看護学科学生の看護技術練習会企画	平成28年3月14日 ～3月15日 平成29年2月20日 ～2月23日	看護学科4年生を対象にして「卒前看護技術練習会」を企画し、運営に関して中心的に関わった。
③シミュレーション教育に関する研究活動	平成23年度 ～平成25年度	プロジェクト研究「チーム医療におけるシミュレーション教育の構築に関する研究」：研究分担者チーム１；「看護学におけるシミュレーション教育の意義と効果」に代表として携わっていた。
	平成26年度 ～平成28年度	地域貢献研究　「地域の医療・保健・福祉・介護職への「IPUあいらぼ」利用促進に関する研究」に研究分担者として携わっていた。
3)他校教育機関での教育活動	平成22年度 ～現在	白十字看護専門学校にて「成人看護援助論(15時間)」の講義を科目責任者として担当している。 成人看護の基本に関する様々な知識について、講義だけでなく、演習を行い、能動的に学びを深めることができるようカリキュラムを組んでいる。

4)大学院（博士前期課程）教育活動	平成21年度 ～平成29年11月末	月1回程度行われる博士前期課程学生対象の合同ゼミに参加し、適宜助言を行っていた。
２　作成した教科書，教材 1)教材作成		
①臨床看護演習　3年生前期必修科目	平成22年度	子宮頸がん患者の事例（周手術期、終末期）
②臨床看護論　　2年生後期必修科目	平成22年度	潰瘍性大腸炎患者の事例を作成し、TBL方式にて演習を行った：20時間
③急性期看護論　3年前期必修科目	平成23年度	手術を受ける患者（広汎子宮全摘術）の事例
	平成26年度	手術を受ける患者（心臓バイパス術）の事例
④OSCE	平成22年度	3年生OSCE：車椅子への移乗　課題修正担当
	平成24年度	3年生OSCE：バイタルサイン（血圧）測定 課題作成担当 4年生OSCE: 育児相談（評価者）
	平成25年度	4年生OSCE:腹部のフィジカルアセスメント 課題作成担当
	平成27年度	4年生OSCE: 吸引　　課題修正担当
	平成28年度	3年生OSCE：胸部のフィジカルアセスメント 課題修正担当
⑤チーム医療演習　4年生後期必修科目	平成28年度	成人期にある乳がん患者とその家族に関する事例を作成し、PBL方式にて4学科（看護学科、理学療法学科、作業療法学科、放射線技術学科）合同の演習を行った。：6時間
2)講義資料作成		担当する授業に関する講義資料を自作している。
①慢性期看護論　2年前期必修科目	平成20年度 ～平成21年度	肝臓（・胆道系）の慢性障害を持つ対象の看護：4時間
②ヘルスプロモーションと看護 2年前期必修科目	平成20年度 平成24年度 ～平成25年度	成人期のストレス：2時間 就労とメンタルヘルス：2時間 ストレスマネジメントの視点としてヘルスプロモーションの観点を取り入れ、幅広い視点で考えられるよう講義を行った。
③終末期看護論　3年前期必修科目	平成20年度 平成21年度	残された家族の家族機能の再構築への支援：2時間 慢性期から終末に向かう人と家族の看護：2時間
	平成22年度	慢性期から終末に向かう人と家族の看護：2時間 残された家族機能の再構築への支援：2時間
	平成23年度 ～平成24年度	終末期にある（患者・）家族の生活の援助：2時間
	平成25年度 ～平成26年度	終末期にある（患者・）家族の生活の援助・残された家族の家族機能の再構築への支援：2時間
④がん看護　4年生後期選択必修科目	平成20年度 ～平成22年度	慢性経過をたどる患者・家族の看護：2時間

⑤急性期看護論　3年生前期必修科目	平成21年度 ～平成26年度	手術室の看護：2時間
⑥ヘルスアセスメント　1年生後期必修科目	平成22年度	バイタルサイン：2時間 身体計測：2時間
	平成23年度 ～平成24年度	心臓のフィジカルアセスメント：2時間 腹部のフィジカルアセスメント：2時間
	平成25年度 ～平成27年度	身体計測：2時間 心臓のフィジカルアセスメント：2時間 腹部のフィジカルアセスメント：2時間 まとめ：2時間
	平成28年度	身体計測：2時間 心臓のフィジカルアセスメント：2時間 まとめ：2時間
⑦成人看護学概論　2年生前期必修科目	平成26年度 平成27年度 ～平成28年度	職場におけるメンタルヘルス：2時間 成人期にある人に特有な健康問題の特徴とその看護：2時間 ストレスマネジメントの視点としてヘルスプロモーションの観点を取り入れ、幅広い視点で考えられるよう講義を行った。また、行動変容を促すための健康行動理論について触れながら、健康問題に対する看護について講義を行った。
⑧成人看護学Ⅰ　2年生前期必修科目	平成26年度 ～平成28年度	演習「足の観察・フットケア」：2時間 成人期における終末期患者の特徴：6時間
⑨成人看護学Ⅱ　3年生前期必修科目	平成27年度 ～平成28年度	手術室の看護：2時間 クリティカルにおける看取り：2時間
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1)科目責任者授業科目授業評価		
①ヘルスプロモーションと看護	平成24年度 ～平成25年度	2年次前期科目（3単位75時間） 小児期・成人期・老年期と異なる世代について、複数教員で授業を実施した。授業の導入には、ヘルスプロモーション活動に長年携わる教員に講義を依頼し、最先端の知識が得られるようにコーディネートを行った。 平成24年度の茨城県立医療大学科目満足度調査にて、総合評価の平均得点は、1.4/2、授業計画、教材、授業内容、課題・評価に関する全23項目の平均得点は、1.3/2として評価を得た。 平成25年度の茨城県立医療大学科目満足度調査にて、総合評価の平均得点は、1.3/2、授業計画、教材、授業内容、課題・評価に関する全23項目の平均得点は、1.3/2として評価を得た。
②ヘルスアセスメント	平成25年度 ～現在	1年次後期科目（1単位30時間） 複数教員で授業を実施した。 平成25年度の茨城県立医療大学科目満足度調査にて、総合評価の平均得点は、1.3、授業計画、教材、授業内容、課題・評価に関する全23項目の平均得点は、1.3/2として評価を得た。 平成26年度の茨城県立医療大学科目満足度調査にて、総合評価の平均得点は、3.9/5、授業計画、授業内容に関する全15項目の平均得点は、3.8/5として評価を得た。 平成27年度の茨城県立医療大学科目満足度調査にて、総合評価の平均得点は、3.9/5、授業計画、授業内容に関する全15項目の平均得点は、3.8/5として評価を得た。

③成人看護学実習Ⅱ	平成26年度 ～平成28年度	3年次後期科目（3単位270時間） 複数教員で実習担当した。 　平成27年度の学生アンケートで、全22項目の評価は平均4.5/5を示し、特に下記の項目での評価が高かった。 ＜平均4.9/5の評価項目＞ ・教員は、学生の意見を認めた上で、アドバイスや指導を行っていた。 ・教員は、学生の個別性に合わせて指導していた。 ＜平均4.8/5の評価項目＞ ・教員は、実習カンファレンスに参加し、適切な助言・指導をしていた。 ・教員の実習中の指導内容に授業との一貫性があった。 ・教員と学生の間のコミュニケーションはよかった。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
５　その他		
1)精神障害者ホームヘルプ研修講師	平成20年2月	ウェルネットより依頼を受け、「精神ヘルパーのメンタルヘルス」についての講義を行った。
2)呼吸理学療法研修会（関東地区）講師	平成22年2月27日	日本理学療法士会より依頼を受け、「吸引法演習」「吸引機器の取扱法実習」の講師として演習を行った。
3)オープンカレッジ「心を学ぶ（シリーズ5）～心身の健康をさぐる」講師	平成22年5月25日	桜美林大学より依頼を受け、「生活習慣の改善と健康 健康な生活をめざして」の講師として講義を行った。
4)第43回日本看護学会－成人看護Ⅱ－学術集会 抄録選考委員	平成24年2月～ 平成24年11月	茨城県看護協会より依頼を受け、投稿演題の抄録査読を行った。
5)学位取得支援コース研修講師	平成24年8月25日	寺子屋ポリフォニーより依頼を受け、「大学評価・学位授与機構での学位取得の経験について」講義を行った。
6)病院研究発表会外部講師	平成24年度～現在	総合病院土浦協同病院看護部より依頼を受け、研究発表会に研究発表の講評を行っている。
7)平成26年度看護教員継続研修講師	平成26年9月20日	群馬県看護教員継続研修企画会議より依頼を受け、「シミュレーション教育の構造及び基本的な考え方」について講義を行った。
8)第56回医学教育セミナーワークショップ講師	平成27年6月6日	岐阜大学医学教育開発研究センター(MEDC)より依頼を受け、「1歩先をいくサマリーの書き方・教え方」について講義・コーディネーターを行った。
9)授業外業務 ①担任業務	平成26年度～ 平成28年度	平成26年度入学20期生の副担任として17名担当し、学生生活のサポートを行っていた。
②サークル顧問	平成20年度～ 平成29年11月末	サークル団体「錦織姫」の顧問として、学外活動のサポートを行っていた。（活動内容：よさこいソーラン節を踊る）
10)実習施設連絡教員	平成22年度～ 平成29年11月末	筑波メディカルセンター病院で行っている実習：成人看護学、小児看護学、公衆衛生看護学、基礎看護学(～25年度)、老年看護学(～22年度)について、日程・実習人数・ロッカー貸し出し等に関し施設側と調整を行っていた。

11)大学広報業務 ①大学オープンキャンパス担当	平成20年度 ～平成29年度	年に2日間行われる大学オープンキャンパスの1日に担当となり、参加か学生・保護者に対して、実習室や使用学習器材を紹介したり、ミニ講座や模擬演習体験を通して学習内容を理解してもらえるよう広報活動を行っていた。
②大学出張模擬授業講師	平成23年10月13日	千葉県立銚子市立銚子高等学校にて「バイタルサイン～人を看るということ～」という講義を行った。
	平成24年8月7日	茨城県立水海道第一高等学校にて「バイタルサイン～人を看るということ～」という講義を行った。
	平成26年5月21日	茨城県立藤代高等学校にて「バイタルサイン～人を看るということ～」という講義を行った。
	平成26年8月6日	茨城県立牛久栄進高等学校にて「生活習慣の改善と健康」という講義を行った。
	平成28年6月23日	茨城県立竜ケ崎第一高等学校にて「生活習慣の改善と健康：健康な生活をめざして」という講義を行った。
③大学内模擬授業講師	平成23年10月27日	大学見学に来た茨城県立伊奈高等学校学生に対して「バイタルサイン～人を看るということ～」という講義を行った。
④大学テーラーメイド体験プログラム担当	平成25年9月6日	茨城県立竜ヶ崎第一高等学校3年生3名に対して、①茨城県立医療大学付属病院施設見学②実習に関しての質問③卒業テーマに関しての質問、全3項目の希望があり、担当者として対応を行った。
	平成26年7月24日	大学見学に来た東洋大附属牛久高等学校学生4名に、担当している成人看護学Ⅰ「成人期にある終末期患者の特徴」の講義を聴講してもらった。
	平成27年7月27日	大学見学に来た茨城県立水戸桜の牧高等学校3年生6名に、担当している成人看護学Ⅰ「成人期にある終末期患者の特徴」の講義を聴講してもらった。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1)看護婦免許	平成5年5月21日	登録番号807381
2)専門健康心理士	平成31年4月1日	登録番号1015
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他 1)競争的研究資金の獲得状況 ①学術研究助成基金助成金：挑戦的萌芽研究	平成26年度～ 平成28年度	タイトル「教授設計ワークシートを活用したシミュレーション看護教育システム開発と教育効果検証（26670925　）」にて研究分担者（研究代表 織井優貴子）として活動している。

②学術研究助成基金助成金：基盤研究（C）	平成27年度～ 平成30年度	タイトル「エンドオブライフケア教育効果を高めるシミュレーション看護教育プログラムの検証（26463281　）」 にて研究代表者として活動している。	
2)学科内役割分担業務		【大学委員会補助】	【全体運営科目】
	平成20年度	図書・研究委員補助	看護研究補助
	平成21年度	自己評価委員会補助	OSCE係
	平成22年度	ホームページ管理委員	OSCE係
	平成23年度	学務委員会補佐	医療総括演習係
	平成24年度		医療総括演習係
	平成25年度	看護研究係補助	
	平成26年度		宿泊研修係 チームワーク入門実習
	平成27年度	【認定看護師教育課程】 受講試験実施委員	実習調整係
	平成28年度		チーム医療演習 実習調整係
	平成29年度	【看護部門委員会等】 看護の日準備委員	
3)茨城県立医療大学付属病院での病院・学科ユニフィケーション活動			
①看護部門委員会業務	平成20年度	教育研究委員会学科委員として、新採用者研修に携わった。	
	平成24年度	看護部情報委員会学科委員として、電子カルテ見直し等の作業に携わった。	
②看護相談業務	平成25年度～ 平成29年11月末	外来看護相談を担当し（月1回程度）、相談業務及びアロママッサージを患者・患者家族（入院・外来問わず）実施していた。	
4)海外視察	平成26年2月27日 ～3月5日	「アメリカの看護大学及び大学院から看護教育を学ぶ」を目的にサンフランシスコ大学及びカルフォルニア州立大学サンフランシスコ大学（ＵＣＳＦ）に研修に行き、①技術演習シュミレーション、ＮＰ（ナーシング　プラクティショナー）の教育場面の聴講、②老年看護研修（摂食・嚥下も含む）、③ＵＣＳＦ関連のクリニックの視察および交流を行った。	

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 新看護学４専門基礎［４］看護と倫理患者の心理(第4版)	共著	平成30年1月	医学書院	告知における倫理的問題に関して事例（余命告知されずに死亡したＡ氏）を通して、患者・家族・看護師の立場から考えられるジレンマと三者が納得する治療方針の決め方について厚生省〈現厚生労働省）がまとめた「末期医療に関するケアの在り方の検討会報告書(1989)」のなかで、末期状態告知の際、十分考慮すべき状況としてあげられている4つの項目を参考に問題解決方法を提案した。 担当部分：看護と倫理 第3章 看護実践における倫理　的問題　Ｂ.告知 p60-64. 共著者：長田久雄，加納尚美，黒田暢子 (抜粋)

2 新体系看護学全書 別巻 ヘルスプロモーション	共著	平成30年11月	メヂカルフレンド社	成人期のヘルスプロモーションに関して概要と実際例を述べた。 担当部分：第4章 各ライフステージにおけるヘルスプロモーション Ⅱ．成人のヘルスプロモーション内 担当部分：「A 成人の健康(p179-181)」「B 健康生活におけるヘルスプロモーション(p192-197)」「C 健康課題（問題）とヘルスプロモーション(p203-207)」「D 看護の役割とその実際(p208-209)」 共著者：市村久美子，島内憲夫，黒田暢子(抜粋)
（学術論文） 1 看護職の健康行動とその関連要因（修士論文）	単著	平成19年1月	桜美林大学大学院	看護職が健康習慣を維持するために必要な要因の検討と、健康習慣と主観的健康感の関係を明らかにすることを目的に、都内A総合病院に勤務する、看護職員291名（回収率54.7%）対象に質問紙調査を行った。 その結果、弱いながらもSOCが影響し、看護職の健康維持増進を進める要因は、夜勤など社会的影響要因の検討と、自身の健康観について理解を深めることが必要となる可能性が示唆された。また、看護職は、自身の生活習慣と「健康」についての意識が不十分であると考えられ一方、心理的健康の指標であるストレス反応は、主観的健康感、健康習慣により差があり、ストレス軽減のためには、身体的側面からの介入も必要であると考えられた。 さらに、現在は症状もなく健康に問題はないと考えているが、医療専門職として「健康習慣」について考える機会が多く、自身の生活習慣に対する漠然とした疑問や不安をもっているのではないかと考えられた。 よって、生活習慣の改善は、心理的健康維持のためにも有用である可能性が明らかになったと考えられた。
2 全領域の教員参加による OSCE実施の評価―看護系大学生の認識から見たOSCEの意義―（査読付）	共著	平成21年3月	茨城県立医療大学紀要 14：1-10	OSCEの教育的効果とその課題について明らかにするために平成17年度～平成20年度の間に、3年次・4年次共にOSCEを受けた学生に対して、OSCE終了後に、無記名、記述式のアンケート調査を行った。 その結果、以下のことが明らかとなった。①約半数の学生がOSCEで技能が十分に発揮できなかったと感じ、約4割の学生が技能発揮できるか否かの要因に「緊張」を挙げていた。②OSCEで合格した学生の約6割が、自己の技術力がないと回答しており、今後は学生が客観的に自己の技術評価ができるためのかかわりの必要性が示唆された。③自己の技術力の向上に役立ったことは、相互学習や自己学習であったと回答した学生は7～8割おり、主体的な学習や技術練習が有意義であると認識していた。④約8割の学生はOSCEが臨地実践力を身につけることに役立っていると認識していたことからOSCEを実施する意義が確認できた。 担当部分：データ分析、結果考察 共著者：髙橋由紀，浅川和美，沼口知恵子，黒田暢子，伊藤香世子，近藤智恵，市村久美子

3 摂食・嚥下障害看護認定看護師の看護活動に関する満足度（査読付）	共著	平成23年3月	茨城県立医療大学紀要16：65-73	本研究は、摂食・嚥下障害看護認定看護師の看護活動を推進する要因について、認定看護師としての看護活動の満足度から明らかにすることを目的として、質問紙調査を行った。対象は、摂食・嚥下障害看護認定看護師として所属・氏名が登録されていた103名であった。有効回答45名(有効回答率44.0%)の回答について、認定看護師としての看護活動の満足度の得点で2群(満足群・不満足群)に分け、関連要因についてt検定を行った。 その結果、「認定看護師としての経験年数」、「認定看護師としての看護活動についての自信」、「職場の受入れ(採用)システム」において得点に有意差がみられた。 よって、摂食・嚥下障害看護認定看護師の看護活動を推進させるには、認定看護師自身が自己研鑽し経験を積み重ね、認定看護師としての看護活動をバックアップする体制を整備することが必要であることが示唆された。 担当部分：データ分析、結果考察、論文作成主担当 共著者：黒田暢子，池田千恵子，川波公香，白坂誉子，星出てい子，市村久美子
4 OSCEにおける教員間の評価の差異と課題（査読付）	共著	平成23年3月	茨城県立医療大学紀要16：1-11	近年，学生の看護実践能力の質を評価する方法として，客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination，以下OSCE）が注目されている。本学でも看護学科全体でOSCE に取り組み，実施を始めて５年が経過する。OSCEにおける評価者間の評価の差異と今後の課題を明らかにするために，各年度の採点結果から総合点および各課題の評価者間の差異を抽出した。 5 年間の評価は，総合点の平均点で比較検討したが，差異はなく概ね公平な評価が行われていた。しかし，課題別の評価では年度により評価者間の差異が統計学的に認められた（$p < 0.05$）。特に模擬患者（Simulated Patient，以下SP）の参加する「コミュニケーション技術」，「育児相談・指導」に関して有意な差がみられた。評価項目別に評価の一致率を算出すると，「共感的・受容的・支持的態度」の一致率が70％未満で低かった。評価の客観性を高めるためには，評価項目を具体的な行動レベルで表現すること，SP による評価が必要となることが示唆された。 担当部分：結果考察 共著者：近藤智恵，市村久美子，伊藤香世子，高橋由紀，沼口知恵子，黒田暢子

5 中年男性勤労者の人間ドックにおける個別相談利用の関連要因(査読付)	共著	平成23年12月	ヘルスプロモーションリサーチ：6(1)：11-18	人間ドックの受診率の最も高い中年男性勤労者の個別相談利用の関連要因を明らかにすることを目的に個別相談を行っているA県内の健診施設を受診した40～50歳代の男性勤労者を対象に調査を行った。 その結果、232名（有効回答79.7%）から回答が得られ、個別相談の利用経験のある者が151名(65%)であった。個別相談の利用に関連する要因は①SF8:日常役割機能（精神）②SF8:社会生活機能③受診回数④検査結果の指摘があること⑤受診後の健康意識の高まり⑥受診後に生活習慣の改善をしていること、だった。個別相談を利用しない要因は①人間ドック受診中の検査内容の説明を役に立つと感じている、であった。 対象者は自身の健康の維持・管理につなげる手段として個別相談を利用していた。対象者の健康づくりを促進するためには、従来の個別相談のみではなく、人間ドックスタッフ全員の関わり全てが相談機能を果たしている意識を持つことが必要である。 担当部分：結果考察 大江佳織，市村久美子，川波公香，黒田暢子，前田隆子，堀田涼子
6 急性期看護論に能動的学習法を取り入れた授業の評価―学生レポートにみられた学びの内容からの予備的な評価―(査読付)	共著	平成26年3月	茨城県立医療大学紀要19：139-149	急性期看護論における「周手術期患者の看護」では，事例をもとに個人やグループワークで展開する能動的学習を促している。最終的な演習の様子はDVD撮影し，学生自身が確認後に学びをレポートする。 本研究の目的は，学生の学びから本教育方法への示唆を得ることである。本学看護学科3年生41名を対象とし，演習参加態度，課題の理解度，提出されたレポート内容等を分析し，学習目標への到達度を検討する。それをもとに授業内容や展開の方法等の妥当性の評価および課題を明らかにする。 結果は，①教育目標や技術演習目標は概ね達成できた。②DVDで自分の援助を確認したことは，学生が自らの援助内容を振り返り学びを深めるうえで有用である。③担当した事例以外の理解が十分でない可能性がある，であった。 本報告は，評価指標が限られており，十分な授業評価とはいえない。すべての学習記録，演習への満足度，テスト得点なども含めた包括的な授業評価が必要である。 担当部分：結果考察 共著者：前田隆子，市村久美子，黒田暢子，梅津百代
7 2013年度オープンキャンパスでのIPUあいらぼ参加者を対象としたアンケート調査　(査読付)	共著	平成26年3月	茨城県立医療大学紀要19：151-160	茨城県立医療大学ではシミュレーション医療教育・研究を充実させることを目的に，IPUあいらぼを2012年度に開室した。その活用方法の1つにオープンキャンパスでの医療学習体験企画の出展が挙げられ，2013年度オープンキャンパスにおいて実施した。出展企画は心肺蘇生法体験，静脈採血体験，胃管挿入体験，衛生的手洗い体験，高齢者体験，PCによる解剖実習体験の6つであった。これらの企画の満足度を調査するため，2013年度オープンキャンパスIPUあいらぼ参加者を対象にIPUあいらぼに参加した感想のアンケート調査を行った。 その結果，多くの参加者から肯定的な意見が得られた。特に静脈採血体験は参加者が多く，肯定的な意見も多かった。 このことから2013年度オープンキャンパスにおけるIPUあいらぼの企画は参加者の満足度が高かったと考えられる。 担当部分：結果考察、論文作成 共著者：増成暁彦，武島玲子，黒田暢子，岩本浩二，伊藤文香，大久保知幸，髙村祐子，福田友秀，瀧本幸司，　正田傑，大澤侑一

8 看護技術の修得状況とシミュレーションとの関連-第1報 卒業時の学生に焦点をあてて-(査読付)	共著	平成27年3月	茨城県立医療大学紀要 20：35-50	平成23年度～平成25年度看護学科卒業生のうち3 年次編入生を除く154名に対し，本学看護学科学生の卒業時の看護技術の修得状況の実態と，看護技術の修得のためにどのような学習方法，特にどのシミュレーション（学内演習）が役立ったと考えているのか明らかにすることを目的に，無記名自記式質問紙調査を行った。 その結果，①看護技術修得度の平均得点が高かった項目は，身体侵襲を伴わない日常生活援助技術が多かった。②看護技術修得に活用した学習方法は，シミュレーションと臨地実習が同等と回答した項目が最も多かった。③看護技術修得度の平均得点が高かった項目の方が，低かった項目よりもシミュレーションが役に立ったと評価していた。 よって，シミュレーションを活用することは，本学学生の卒業時の看護技術修得度を高める可能性があることが示唆された。 担当部分：調査票作成、調査実施、データ分析、結果考察、論文作成主担当 共著者：黒田暢子，市村久美子，高橋由紀
9 「周手術期患者の看護」演習におけるアクティブラーニングとその評価 - 学習効果および自己学習の動機づけとその達成感に焦点をあてて - （査読付）	共著	平成27年3月	茨城県立医療大学紀要 20：13-24	本研究の目的は，周手術期看護の演習におけるアクティブラーニングが学生の課題の理解，自己学習の動機づけ，および学習の達成感につながったかを明らかにすることである。本学看護学科3 年生52名を対象にアンケート調査を実施した。 結果は，多くの学生が課題事例の病態と看護について理解できたと評価していた。また学習方法について，多くの学生が自己学習の動機づけにつながったと評価し，自己学習の動機づけが高い学生ほど，教員の助言を活用して周手術期の合併症や看護の役割の理解を進めており，意欲的に課題に取り組み，達成感を得ていた。また，達成感が高いほど，今後の学習への自信（効力感）が高かった。さらに自己学習時間の長さと負担感は有意に関連しており，負担感の主な内容は他の科目の課題との重複であった。 本結果より教員は，学生が学習成果を臨床実習で活かし，再学習できるよう指導していく必要がある。 担当部分：結果考察 前田隆子，市村久美子，黒田暢子，梅津百代
10 看護技術の修得状況とシミュレーションとの関連ー第2報 卒業時と卒後1年後の比較ー（査読付）	共著	平成28年3月	茨城県立医療大学紀要 21：51-64	平成23 ～ 25 年度看護学科卒業生のうち卒後1 年後の調査協力に同意が得られた3 年次編入生を除く64 名に対し，卒後1 年後の看護技術修得状況と実務経験の有無，学生時代に看護技術修得のために使用した学習方法，特にどのシミュレーションの教育技法が臨床現場で役立ったと考えているか，質問紙調査を行った。 その結果，看護技術修得度は，卒業時より上昇していた看護技術項目が多く，実務経験を積んでいた。看護技術修得のために学生時代使用した学習方法は，修得度が高い項目1/3 でシミュレーションと回答が得られた。看護技術修得度の低い項目は，実務経験が少ない項目で，看護基礎教育と看護継続教育が連携しながら，適切な教授方法や時期を選択し，強化していく必要があることが示唆された。また，繰り返し技術練習することが看護技術修得を促進する要因であり，看護実習室だけでなく「IPU あいらぼ」を活用する動機づけにつながる可能性が考えられた。 担当部分：調査用紙作成、調査実施、データ分析、結果考察、論文作成主担当 共著者：黒田暢子，市村久美子，高橋由紀

11 臨床における看護技術教育の現状とニーズ－医療大学スキルラボの地域活用に向けて－（査読付）	共著	平成28年3月	茨城県立医療大学紀要 21：119-125	本研究では茨城県立医療大学スキルラボ「IPU あいらぼ」を地域で有効に活用するための企画・運営の資料とすることを目的に，新人看護師研修の実態と臨床看護技術教育におけるニーズについて調査を行った。県内181 の病院における継続看護教育の企画・運営を担当する者に郵送でアンケート協力を依頼した。64件（回収率35%）の回答があり，次のことが明らかになった。1. 回答した茨城県内の病院の75%で厚生労働省のガイドラインに則った新人看護師研修が実施されていた。2. 各病院では教育用シミュレータを保有し概ね活用されていたが，その多くは技術トレーニングでありシナリオを用いたシミュレーション教育の実施率は低かった。3. 本学が「IPU あいらぼ」を通して地域の継続看護教育に貢献するための方策として，①「看護」の視点を強調したシミュレーション研修，②現場の看護教育力の向上を目指した指導者研修の実施が挙げられた。 担当部分：結果考察、論文作成 共著者：吉良淳子、黒田暢子、高村祐子、武島玲子
12 看護基礎教育におけるシミュレータを用いたシミュレーション教育の実態調査 （査読付）	共著	平成28年6月	日本シミュレーション医療教育学会雑誌 4：22-28	看護基礎教育において、シミュレーション教育を実施する際、どのようなシミュレータや教材を用いているかを明らかにすることを目的に、日本看護系大学協議会の会員校234校の成人看護学領域の責任者又は、現在シミュレーション教育を担当している教員対象に、無記名自記式調査を行った。 その結果、主に所有及び使用しているシミュレータは、タスクトレーナー、低忠実度シミュレータ、中忠実度シミュレータであった。使用率が高い演習・看護技術は、「吸引」「フィジカルアセスメント」など身体侵襲度が高い、又は異常所見の学習も必要な項目であった。また、 主な使用教材は、独自に作成したシナリオ・技術項目チェックリスト・自己評価表であった。 担当部分：調査票作成、調査実施、データ分析、結果考察、論文作成主担当 共著者：黒田暢子，織井優貴子
13 A病院における「急変対応院内認定看護師養成コース」研修プログラム作成の試み～研修終了後の急変対応に関する自己の意識の変化からの評価をふまえて～（査読付）	共著	令和3年3月	常磐看護学研究雑誌 3:71-78	A病院における急変対応院内認定看護師養成研修が受講者に及ぼす影響を、研修終了後の急変に関する自己の意識の変化に対する認識から明らかにした。 その結果、【急変対応院内認定看護師としての役割の遂行】【看護師としてのスキルアップ】【院内認定看護師への役割遂行への困難感】の3つのカテゴリーが抽出され、期待される役割を遂行している一方で、役割遂行のための困難感を認識していたことが明らかになった。 担当部分：データ分析、結果考察、論文作成 共著者：井上顕子、黒田暢子

14 高齢者への生活史インタビュ-体験が看護学生にもたらす学習効果(査読付)	共著	令和4年3月	常磐看護学研究雑誌 4:23-32	老年看護の授業後課題として看護学生が実施した高齢者に対する生活史インタビュー体験からの学びの内容を明らかにし，その効果の検討を行った。 その結果、の5カテゴリーが抽出され、高齢看護学生の高齢者理解を促進し，老年看護実践への示唆を得る学習方法として効果的であった。 担当部分：データ分析，原稿の校正，研究プロセス全体への助言 共著者：菅原直美、黒田暢子、井上顕子
（その他） 「総説等」				
1 医療事故の調査分析モデル事業に活躍する「調整看護師」	共著	平成18年3月	Heart Nursing 19(3):284-285	2004年4月、日本内科学会、日本外科学会、日本法医学会、日本病理学会が、死因究明にかかる第三者機関の設置に関する共同声明を発表し、2005年9月より、厚生労働省の補助事業として、「診療にカレンする死亡の調査分析モデル事業」が開始された。その中で、「調整看護師」（東京地域では、コーディネーターと呼ぶ）が注目されている。 調整看護師は、病院がご遺族の同意を得てモデル事業の調査を依頼するとき、窓口の電話で事情を聞き、総合調整医が受け入れの当否を判断して解剖実施場所を決め、担当医を招集するのを助ける役割を担っている。 モデル事業では、近い将来、医療安全向上のため法や制度の改革を目指し、調整看護師は、病院医療安全担当者と協力して、医療の質の向上に貢献する外部評価専門家としても期待されている。 担当部分：結果考察 共著者：武田洋子，長尾式子，古川亮子，川江壮子，黒田暢子，吉田謙一.
2 看護学におけるシミュレーション教育の意義と教授方法～SimTikiSimulationCenter看護教育ワークショップに参加して～（査読付）	共著	平成24年3月	茨城県立医療大学紀要 17：65-69	近年、医療教育現場では、基本的な知識や技術の習得に加え、応用力、問題解決能力、実践力を身に付けた人間性豊かな人材育成が求められる。看護教育においても同様であり、上記能力を育成するための教育方法として、シミュレーション教育が注目されている。本学においても、シミュレーションを用いた演習は、すでに導入されている。 そこで今回、筆者は学習効果の高いシミュレーション教育の教授法とはどのようなものであるのかについて学ぶため、シミュレーターを活用する方法や、プログラムの作成方法、運営方法などシミュレーション教育の教授方法の習得を目的に、ハワイ大学医学部SimTikiシミュレーションセンターで行われた看護教員・指導者向け看護教育ワークショップに参加し、概要について報告し、看護学におけるシミュレーション教育の意義と今後の本学での活用方法について検討を行った。 担当部分：論文作成主担当 共著者：黒田暢子，髙橋由紀，市村久美子

3 看護学科カリキュラム改定作業について(査読付)	共著	平成25年3月	茨城県立医療大学紀要 18：81-87	本稿の目的は，看護学科カリキュラム改定作業を記録に残し，次回改定の際に役立てる資料とすることである。 看護学科では，平成25（2013）年度カリキュラム改定のために約1 年をかけて作業を行ってきた。作業開始にあたってカリキュラム改定の共通理解を持ち，作業工程案を計画し，ワーキンググループを発足させた。途中，各領域の意思決定の必要性から領域代表者で検討することになった。その結果，新たにディプロマポリシー，カリキュラムポリシーを作成し，コース編成を整理したカリキュラムを作成することができた。 結果的に，従来の卒業要件の総単位数を減少させ，文部科学省の狙うところの修学時間確保の条件整備にもつながったと考える。 担当部分：結果考察 共著者：加納尚美，松田たみ子，市村久美子，北川公子，山口　忍，小室佳文，渡邊尚子，髙橋由紀，川波公香，長岡由紀子，綾部明江，中村摩紀，髙村祐子，沼口知恵子，黒田暢子，荒木亜紀，関根聡子
4 ユニフィケーション活動における外来看護相談の取り組み(査読付)	共著	平成27年3月	茨城県立医療大学紀要 20：113-121	本学の特徴の一つとして，大学と付属病院の「ユニフィケーション」が行われていることがあげられる。看護学科は当初，教員が付属病院看護職員として数か月間勤務することや，教授職が看護部長を兼任するなどの取り組みを行っていた。しかし，大学での教育活動と兼務という時間的制約等のため，現在継続して行われているのは，副看護部長の兼任や付属病院委員会への参画であり，2013年度から看護部長職は看護管理支援監という役職になるなど，ユニフィケーションの形を変えてきている。 今回，看護学科のユニフィケーションの取り組みの一つとして，主に外来における看護相談業務を学科全体で1年間取り組んだ。取り組みに関して教員に質問紙調査を行ったところ、看護相談によって教員として得られた内容自分たちの研究実践や実習指導にはあまりつながっていなかったが、看護実践・社会貢献・病院組織の一員としての意識は高くなっていた。また、ユニフィケーションとしての今後の関わり方については、今回の方法を「そのまま続けたい」という意識のものは少なかったが、「定期的に病院に関わっていきたい」，「スタッフの看護研究の相談にのっていきたい」，あるいは「いつでもいいのでニーズのある時には病院と関わりたい」という意識を持っていた。 担当部分：結果考察 共著者：市村久美子、渡辺尚子、川波公香、黒田暢子、他

5 卒前看護技術練習の教育的効果の可能性	共著	平成29年3月	茨城県立医療大学紀要 22：73-79	本学看護学科4年生11名を対象に卒前に看護技術練習を実施し、教育的効果の可能性について学生及び教員の評価から検討を行った。 実施した練習項目は、学生の希望が多かった「輸液管理」「静脈血採血」「静脈内注射」「筋肉内注射」「持続的導尿」の5項目とした。IPUあいらぼに教員が看護技術項目別にブースを作成し、学生主体で練習し、不明な点があった際には、ブース担当の教員に助言をもらうという方法で実施した。 その結果、学生・教員とも看護技術修得の場として意義があったと一定の評価を得た。また、学生の自己効力感に変化はみられなかったが、満足感が高く、看護技術修得の学習意欲を高める内発的動機づけとなる可能性が示唆された。 担当部分：調査用紙作成、調査実施、データ分 析、結果考察、論文作成主担当 共著者：黒田暢子、吉良淳子、松田たみ子、武島玲子、髙村祐子、鶴見三代子、阿部尚美、髙橋由紀、川野道宏、吽野智哉
「学会発表等」				
1 「死の準備教育」への援助-介護福祉士養成課程における授業での試みについて-	-	平成17年8月	日本ヒューマン・ケア心理学会第7回大会（神奈川）	介護福祉士が死別による喪失体験からのストレスを、自らコントロールし、死を準備する利用者への適切な援助をするきっかけとなるよう、授業化を試み、介護福祉士養成校学生66名に対して全14回実施した。授業効果について「理想の死」についての授業前後の感想、意見から分析を行ったところ、授業により、各人の理想の死について知り、多様な考え方に触れることで「死」に対する個々の価値観の気づきにつながったことがわかった。 共同発表者：奥田訓子、黒田暢子、石川利江、長田久雄
2 大学院生の就学生活におけるストレッサー要因に関する検討	-	平成18年9月	日本ヒューマン・ケア心理学会第8回大会（神戸）	大学院生の特性が多様化しつつある現状から、年齢、働いた経験、生活状況としてひとり暮らしに焦点をあて、大学院生がどのようなストレッサーに直面しているのかを検討することを目的とし、A県4大学大学院に通う20～50歳代の院生80名を対象に自記式調査票を配布し、回答が得られた76名（回収率95.0%）のうち不備のあった調査票を除いた73名を分析対象とした。 その結果、働いた経験がなく、ひとり暮らしである場合、実存（自己）ストレッサーを持つ傾向にあることがわかった。 共同発表者：森田りえ、黒田暢子、片山富美代、長田久雄

3 大学院生の社会人経験とストレス要因との関連	－	平成18年9月	日本健康心理学会第19回大会(京都)	多重な役割をもつ社会人大学院生のストレス要因について、社会人経験をもたない大学院生と比較しながら検討することを目的とし、Ａ県4大学大学院に通う20～50歳代の院生94名を対象に自記式調査票を配布し、回答が得られた91名（回収率97.0%）のうち不備のあった調査票を除いた88名を分析対象とした。 その結果、社会人経験をもたない大学院生は、社会人経験をもつ大学院生よりストレッサーストレス反応が高かった。年齢別でも20歳代の方が、30歳代以上の大学院生よりもストレッサーストレス反応が高かった。 よって、社会人経験をもつこと、年齢を重ねることは、大学院生活におけるストレッサーストレス反応に肯定的影響を及ぼしていることが明らかになった。 共同発表者：黒田暢子、森田りえ、片山富美代、長田久雄
4 看護職の健康習慣に影響を及ぼす要因の検討	－	平成19年9月	日本健康心理学会第20回大会（東京）	生活習慣のうち、心身の健康と明確な関係があるといわれている健康習慣をとりあげ、看護職の健康習慣全般に影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的とし、Ａ県総合病院に勤務する看護職員を対象に自記式調査票を配布し、回答が得られた291名（回収率54.7%）のうち、男性、「交替勤務」「日勤」以外の勤務形態を除外した204名を分析対象とした。 その結果、森本の8つの健康習慣の得点では、不良に分類される人が7割を超えていた。また、交代勤務の有無、首尾一貫感覚が、健康習慣に有意に影響を及ぼしていることがわかった。 共同発表者：黒田暢子、長田久雄
5 看護師の健康習慣と主観的健康感及びストレスとの関係	－	平成20年9月	日本健康心理学会第21回大会(東京)	看護師の健康習慣と主観的健康感との関連を明らかにすることを目的とし、Ａ県総合病院に勤務する看護職員を対象に自記式調査票を配布し、回答が得られた291名(回収率54.7%）のうち、欠損値があった人と男性を除外した233名を分析対象とした。 その結果、健康習慣と主観的健康感に有意な関連はみられず、職業として健康を考える機会は多くても、自らの生活習慣におきかえて捉えていないことが考えられた。しかし、健康習慣と主観的健康感の認識のズレは、ストレス反応へ有意な影響を及ぼしていることから、自分の健康状態を理解していくことは、身体的健康だけでなく心理的健康の改善へつながる可能性が示唆された。 共同発表者：黒田暢子、長田久雄
6 高等学校生徒の対人信頼感と社会的不安について	－	平成20年9月	日本健康心理学会第21回大会(東京)	高等学校での対人交流を目的とした介入授業を行うにあたっての基礎データの収集を目的として質問紙調査を行い、自尊感情、信頼感と社会的不安との関連を検討した。Ａ県立高等学校1年生185名（男子92名、女子91名）を分析対象とした。 その結果、対人信頼感が増すほど、社会的場面を不安に思い、回避するというように、友人関係の中でのお互いに傷つき合わないよう過剰に配慮しあう傾向が示された。 共同発表者：奥田訓子、米川和雄、鈴木文子、北見由奈、石川利江、茂木俊彦、黒田暢子

7 対人信頼感を高める体験型授業の効果について	－	平成20年9月	日本心理学会第72回大会（北海道）	高等学校におけるキャリア教育のあり方を検討する目的のもと、対人信頼感を高める体験型授業（コーチングをベースとした心理教育）を実施し、質問紙にて効果判定を行った。Ａ県立高等学校1年生104名（男子47名、女子58名）を分析対象とした。 その結果、身近な人との距離感においては、先生のみ授業後の距離感が有意に縮まった。また、基本的信頼感も授業後に有意に高まっていた。さらに、自尊感情得点低群いおいて対人距離得点が有意に低くなり、普段から積極的に人と関わりを持たない生徒において、今回の体験型授業がより効果を示す可能性が示唆された。 共同発表者：奥田訓子、黒田暢子
8 看護師の健康習慣、主観的健康感に関連する要因の比較～勤務形態別による検討～	－	平成20年12月	日本ヘルスプロモーション学会第6回大会(茨城)	看護師の主観的健康感に関連する要因が交代勤務の有無によりみられるのか、健康習慣の実態をふまえながら、健康管理に関する自己効力感、ストレス反応を用いて比較検討を行った。 Ａ県総合病院に勤務する看護職員を対象に自記式調査票を配布し、回答が得られた291名(回収率54.7%）のうち、欠損値があった人と男性を除外した185名を分析対象とした。 その結果、森本の８つの健康習慣では、交替勤務群では約8割が不良であった。主観的健康感では、健康習慣をコントロールできるかどうかが関連するのは交替勤務群のみだった。ストレス反応では、日勤勤務は身体的状態で、交替勤務群では心理的・身体的状態の両方が関連していた。 共同発表者：黒田暢子、長田久雄
9 摂食・嚥下障害看護認定看護師の看護活動に関する自己評価と自信についての検討	－	平成22年12月	第30回日本看護科学学会学術集会（北海道）	摂食・嚥下障害看護認定看護師の看護活動に関する自己評価と自信について、2008年12月時点で日本看護協会ホームページに登録されていた摂食・嚥下障害看護認定看護師103名対象に自記式調査票を配布し、回答のあった45名（回収率44%）を分析対象とした。 その結果、自己の看護活動を概ね肯定的に自己評価していたが、自信につながる要因は、患者や看護師との関わり、施設の受け入れ状況と直接評価される項目に限定され、積極的に活動していても活動の成果を客観的に評価する指標が不明瞭で適切な外部からのフィードバックを得られないため、自信がもてない状況にある可能性が示唆された。 共同発表者：黒田暢子，川波公香，池田千恵子，星出てい子，白坂誉子，市村久美子
10 中年男性勤労者の人間ドックにおける個別相談利用の実態	－	平成24年12月	第10回日本ヘルスプロモーション学会学術大会（東京都）	人間ドックを受診する中年男性勤労者の個別相談利用の実態を明らかにすることを目的とし、Ａ県内の健診施設を受診した40～50歳代男性勤労者に自記式調査票を配布し、回答が得られた232名（有効回答率79.7%）を分析対象とした。 その結果、対象者は個別相談を好評価しておりその効果は期待できるが、実際に個別相談を毎回利用する者は少なかった。 共同発表者：大江佳織，市村久美子，川波公香，黒田暢子，前田隆子，堀田涼子

11 急性期看護論に能動的学習法を取り入れた授業の評価　―学生レポートにみられた学びの内容から―	－	平成26年2月	平成25年度茨城県看護研究学会　（茨城）	学生の演習参加態度や課題への理解、技術演習時に撮影したDVD確認後に学生が提示したレポートの内容を分析し、学習目標に対する学生の到達度を検討すると同時に、の動的学習を促す授業内容や構成、展開の方法等の妥当性の評価および課題を明らかにすることを目的とし、平成25年度看護学科3年生必修科目「急性期看護論」履修者41名を分析対象とした。 その結果、学生は自分たちが担当した課題について積極的に取り組み、グループワークやディスカッションなどを限られた時間の中で行う努力していた。今後は、急性期看護では必要となるリスクの予測と予防的介入に関しては強化したアセスメントができるよう意識的に関わっていく必要がある。また、教授法の妥当性について、①グループワークやディスカッション、プレゼン等演習のみで教授する：疑問が解決された時のインパクトが記憶として残る知識となり、さらなる興味を触発したり学習意欲を高めたりすることにつながっていく、②技術演習の風景をDVDに録画し、演習終了後に視聴する：学生の学びが概ね目標を達成していたことから、学生の理解を助けるうえで非常に有効であった、とそれぞれ考える。 共同発表者：前田隆子,市村久美子,黒田暢子,梅津百代
12 急性期看護実習に向けた学内演習の意義 -看護学生の学内演習後の自信に焦点を当てて-	－	平成26年8月	日本看護研究学会第40回学術集会(奈良)	学内演習を繰り返し経験することが、学生の自信の向上につながるか検討することを目的に、看護学科3年生必修科目「急性期看護論」履修者40名に対して質問紙調査を行った。 その結果、学内演習の経験回数の違いによる自信の平均得点を課題毎に比較したところ、すべての課題で演習経験が2回目の学生の方が高く、経験回数が多いほど技術習得の自信が向上した。 よって、学内演習を反復して経験することは、学生の技術習得に関する自信を高める可能性があることが示唆された。 共同発表者：黒田暢子,市村久美子,前田隆子,梅津百代
13 看護学基礎教育におけるシミュレータを用いたシミュレーション教育の実態調査	－	平成27年8月	日本看護学教育学会第25回学術集会（徳島）	看護基礎教育では、どのようなシミュレータを用いてシミュレーション教育を実施しているかを明らかにすることを目的に、日本看護系大学協議会の会員校 234校（2014年4月1日現在）対象に独自に作成した無記名自記式質問調査を行った。その結果、看護基礎教育で使用しているシミュレータはタスクトレーナー、低忠実度シミュレータ、中忠実度シミュレータだった。 また、シミュレーション教育は、身体侵襲度の高い看護技術項目で多く用いられていることや独自に作成したシナリオ等活用しながら実施されていることがわかった。 共同発表者：黒田暢子，織井優貴子，佐々木雅史，福田美和子

14 看護学基礎教育におけるシミュレータを用いた看護教育方法の有用性に関する実態調査	－	平成27年8月	日本看護研究学会第41回学術集会（広島）	看護学基礎教育における高忠実度シミュレータを用いた教育方法の導入を促進又は阻害する要因を明らかにすることを目的に、日本看護系大学協議会の会員校 234校（2014年4月1日現在）対象に独自に作成した無記名自記式質問調査を行った。 その結果、高忠実度シミュレータを用いた教育方法の導入の促進要因としては、シミュレータのメリットを活かした教材を作成すること、阻害する要因としては、①シミュレータが高価である②操作・活用方法が十分に浸透していない③シミュレータを使用しやすい教育環境が整っていないことがわかった。 共同発表者：黒田暢子，織井優貴子，福田美和子
15 臨床における看護技術教育の現状とニーズ調査－医療大学スキルラボの地域活用に向けて－	－	平成27年8月	日本看護研究学会第41回学術集会（広島）	医療系大学のスキルラボを地域で有効に活用するため、県内医療機関における臨床看護技術教育のニーズを把握し、企画・運営の資料とすることを目的として、Ａ県内181病院を対象とし質問紙調査を行い、64件（回収率35.3%）を分析対象とした。 その結果、多くの病院で看護継続教育が行われていたが、小規模病院では教育設備に課題があることが明らかになった。また、Ａ県医療系大学のスキルラボには、教育担当者向け研修と、シナリオを用いたシミュレーション教育の希望が多く、臨床に臨床に即した実践力を高める教育が求められていた。 共同発表者：吉良淳子、黒田暢子、高村祐子
16 周手術期看護におけるアクティブラーニングの効果の検証-課題理解、動機づけ、および達成感への影響-	－	平成27年8月	日本看護研究学会第41回学術集会（広島）	Ａ大学看護学科3年次履修科目「急性期看護論」では、事例を元にした学生の自己学習とグループワークを中心としたアクティブラーニングによる授業を行っている。この授業形式による学生の課題理解の効果を検証するとともに、学生の学習のサスナビリティを左右する動機づけや達成感、今後の学習への自信〈効力感〉にどう影響するかについて明らかにすることを目的に、履修者53名を対象に質問紙調査を行い、52部（回収率98%）を分析対象とした。 その結果、学生の自己学習とグループワークを中心としたアクティブラーニングは、学生が課題の理解を進めるうえで概ね効果的であった。また、学習への動機づけも高まり、達成感や今後の学習への自信にもつながった。 共同発表者：前田隆子,市村久美子,黒田暢子

17 卒後1年後の卒業生の看護 技術修得度に関連する要因の検討	－	平成28年8月	日本看護研究学会第42回学術集会（茨城）	卒後１年後の看護技術修得状況と看護技術修得度に関連する要因について、在籍中のシミュレーション教育を含め検討することを目的として、平成23年度～平成25年度看護学科卒業生のうち卒後1年後の調査協力に同意が得られた3年次編入生を除く64名を対象に、無記名自記式質問紙を行い、38名（回収率59%）を分析対象とした。 その結果、看護技術修得度の平均得点は、91項目中63項目で3.0以上と高い得点を示し、自身の看護技術修得度に関して一定の自己評価を行っていた。実務経験の有無では、「排泄援助技術（5項目）」「清潔・衣生活援助技術（6項目）」「呼吸・循環を整える技術（10項目）」「与薬の技術（14項目）」「救命救急処置技術（5項目）」「症状・生体機能管理技術（７項目）」「安全確保の技術（3項目）」において、有意な相関がみられた項目が多かった。 学生時代のシミュレーション教育は役に立ったかでは、「救命救急処置技術（4項目）」「感染予防の技術（5項目）」「安全確保の技術（3項目）」において、有意な相関がみられた項目が多かった。 一人で実施できる自信があるかでは、ほぼすべての看護技術項目で有意な相関がみられた。 本研究の結果から、臨床では実務として、看護基礎教育ではシミュレーション教育の中で「繰り返し経験を積んだこと」が、看護技術修得に強く関連していることが考えられた。 共同発表者：黒田暢子，市村久美子，髙橋由紀，吽野智哉
18 エンド・オブ・ライフ・ケア教育における学生の学習意欲を高める教育方法の検討第1報	－	令和4年12月	日本看護看護科学学会第42回学術集会（広島）	教育システム設計（Instructional systems design:ISD）プロセスを用いて、現行のエンド・オブ・ライフ・ケア教育に関して、学生の学習意欲を高めるための動機付け方策としてシミュレーションが活用できるか、教育内容の検討を行った。筆者が担当していた授業内容を対象とし、教育内容の継続点と変更点の評価を行うため、鈴木（2012）が作成した「授業設計の点検ワークシート（記述式）」、新たに教育者が取り入れる動機付け方策を明らかにするため、Keller（2010）が作成した「簡易版学習意欲デザイン点検表」を用いて、学習者の特徴、学習課題、教材、教授方略に関して、A RCS（学習意欲に関連する４つの概念）モデルに沿って分析を行った。その結果、授業内容の継続点と変更点については、概ね科目の目標を達成しているが、不足箇所があることを確認した。 学習意欲に関する点検では、学習者の興味が高いことが予想されたが、学生自身の実体験のない内容は難しく、学習意欲を低下させる可能性があった。そのため、状況に応じた患者役（模擬患者、シミュレータ）を選択しながら、例えば、臨死期のケア場面にシミュレーションを取り入れることで、学生の自信や満足感をもって授業に臨めるような環境調整することが、動機付け方策として必要と評価できた。 共同発表者：黒田暢子，市村久美子